

東日本大震災12年

東日本大震災の津波で児童・教職員計84人が犠牲になった宮城県石巻市の大川小で、児童の遺族が務めてきた語り部の一部を地元の大学生が担う試みが始まった。遺族の思いや経験を学び、今秋にも来訪者への案内役に立つ。11日で震災から12年5カ月。語り手の多様化を模索する中、被災経験のない若い世代が教訓をつなぐ。

「11」は子どもたちが運動会で走り回った場所です。そこにあの日、津波が来しました。津波の爪痕が残る校舎の前で7月下旬、6年生の次女みずほさん（当時12）を亡くした佐藤敏郎さん（59）が語りかけた。東北大（仙台市）と石巻専修大（石巻市）の学生計5人が真剣な表情でうなずき、メモを取る。

佐藤さんは、6年生の次女真



大川小遺族の佐藤敏郎さん（左端）の語りを聞く上園真輝人さん（前列中央）ら。7月、宮城県石巻市

大川小 大学生が語り継ぐ 遺族の思い学び案内役に

などを、1時間以上かけて説明を決めた。生半可な気持ちでできる仕事する。「未来の命を守るために」との願いからだ。

ただ語り部の依頼は年々増え、鈴木さんは「平日の申し込みはお断りすることもある」と打ち明ける。最近、来訪者には震災後に生まれた子どもの姿も目立つ。「年が近い世代が話した方が受け止められやすいのでは」とも考えた。

そこで今年2月、以前からイベントの手伝いなどで交流があった東北大のボランティア団体「スクラム」に協力を依頼。石巻専修大の学生にも知人経由で声をかけた。

「大川小の出来事を経験していない自分たちが語っていいのかわ」。打診を受けた学生から、戸惑いの声も漏れた。それでも、さいたま市出身で東北大2年の上園真輝人さん（19）は「来訪者も被災経験のない人がほとんど。同じ立場の自分だからこそ伝えられることがある」と参加を断る予定だ。

佐藤さんは「震災伝承は遺族や被災者だけのものではない」と言い切る。「知らないことを学べるということ。そんな世代と一緒に新たな道を切り開きたい」